

「失われた仏教遺物」

はいぶつきしやく

香取神宮と廃仏毀釈

香取遺産

Vol. 51



▲江戸後期の香取神宮
（「香取参詣記」より）



◀観福寺所蔵の懸仏
（葉師如来）

香取神宮は、常陸の鹿島神宮と常に並び称される東国最大の古社です。

このような由緒ある神社でも既に奈良時代から仏教と在来の神祇信仰が混淆・調和した、いわゆる神仏習合の状況にありました。

中世以降に描かれた絵図などによれば、本殿の後方に一切経や大般若経を納めていた宝形造の経堂（経蔵）。拜殿左側には愛染明王を宮殿に安置し、夏経法楽を行っていた愛染堂（安居堂）などの仏教施設があったことがわかります。

さらに、本殿内陣の神座前には「懸仏」と呼ばれる本地仏4軀（葉師如来、釈迦如来、地藏菩薩、十一面観世音で鎌倉時代の製作）が納められていました。これは仏・菩薩が人々を利益・

救済するために神の姿をかりて顕現するという本地垂迹説によります。

しかし、1868年（明治初）に新政府が神仏習合の慣習を禁止し、神道と仏教、神と仏、神社と寺院とをはっきり区別させる「神仏分離令」（神仏判然令）を施行します。これが契機となつて日本各地で仏教施設を破壊するなどの廃仏毀釈運動が起こります。

有名などころでは、奈良の春日大社ゆかりの興福寺が売り出され、買い手がつかなくなったため、遺されたということもありました。香取神宮でも1868年11月、境内にあった愛染堂と経堂が神職などによって取り壊され、本殿の仏像は取り除かれて売却されてしまします。

ほぼ同じ時期に宮中台にあった十一面観音を本尊とする神宮寺（金剛宝寺）の本殿・三重塔・鐘楼堂などの建物も悉く取り壊されています。

それでも本殿の「懸仏」4軀は、市中で売られていたものを、地元佐原の篤志家が1869年（明治2）に買い戻し、牧野の観福寺に納めました。現在、これらは国の重要文化財に指定されています。

また、経堂にあった一切経や般若経の一部は研究機関・図書館に所蔵されているものもありますが、多くの仏教遺物は散逸し、愛染明王などはその存在すら伝わっていません。

問い合わせ
生涯学習課 ☎(50)1224